近江縣物語

卷之五

へ 13
3252

へ13
3252
門へ13
3252
巻
昭和十一年
二月二四日
購求
11-2-24

近江縣物語卷之五

石山寺

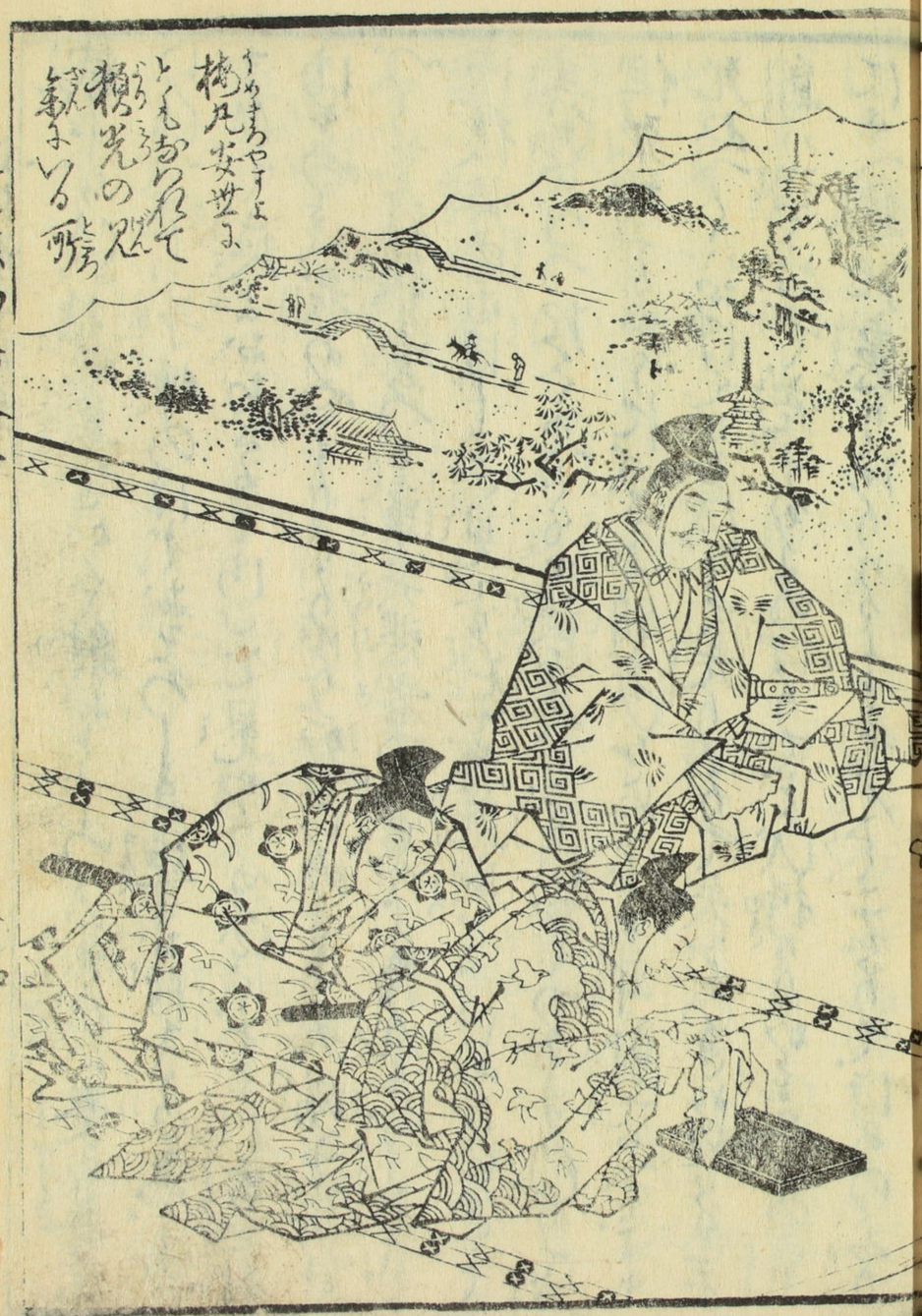
源の頼光朝臣と申して、代々朝家の
父子孫王經基王、すべて先祖源氏を称ぜられ、
御守りとして忠勤をはげませ、此君武威の遅きのみ
ならず、和歌の道をもよく好まれ、下をこのんでまぜの
れ、ひとしれず弓矢をとるほどの者ハかゝる君も世をおハしますのとて、草
の風靡くがごとく、なびき従ひ、敬ひかしづき奉りぬ。此比
盗賊國々をおこりて、さつがいをなして京都を騒がせ、四天
王などいへる武士をおかせて、昼夜皇居をまもらせ給ふ。
此時御願望の事ありて、昨夜より石山寺に参りこもるに、

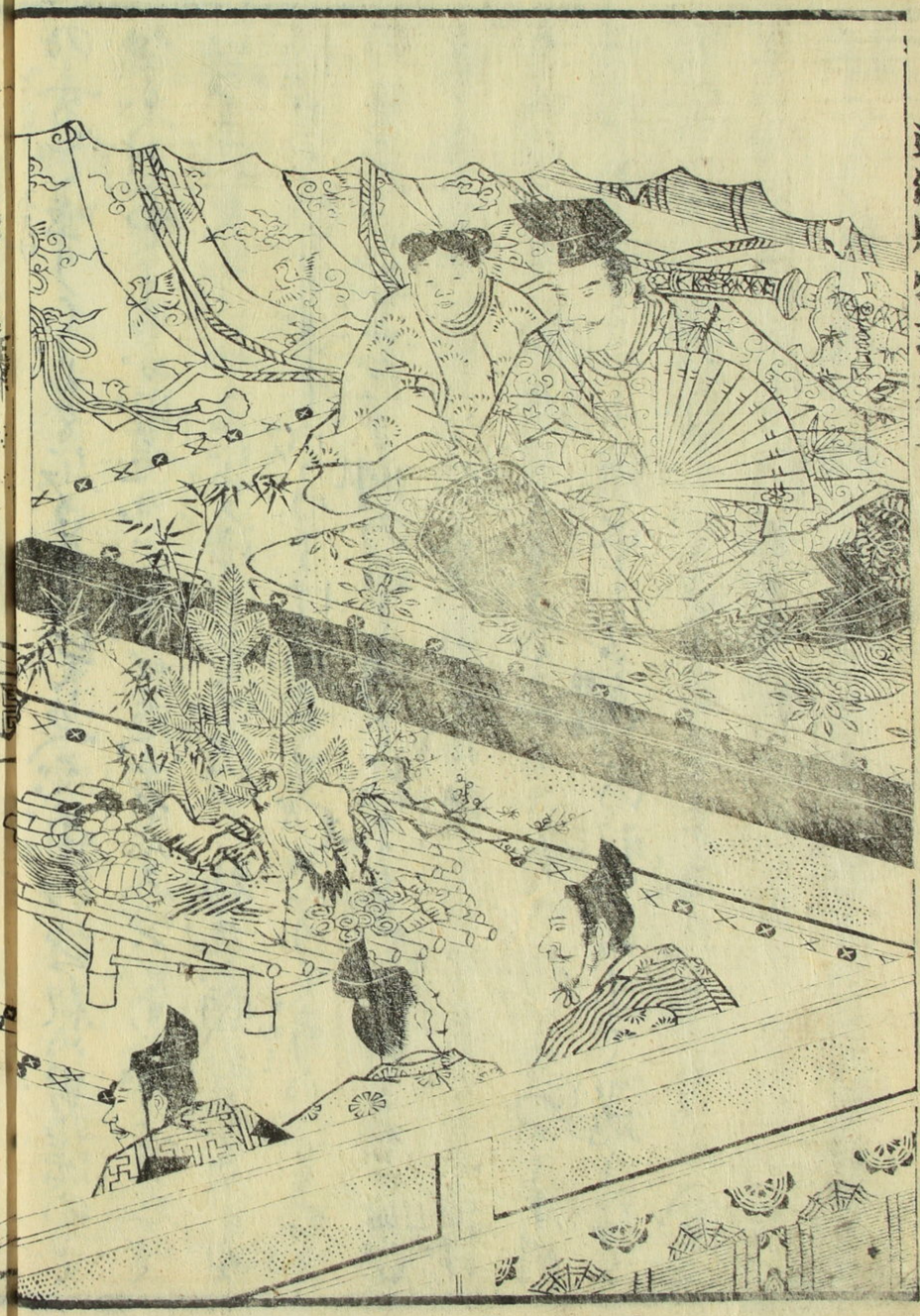
今日は客殿に入おちついて湖水を眺望ておりて庭の
かたへはおてれる櫻のなごりなる笑こぼれるを遊覽ぶ
うちつめるいとでがうん山樣とうちしもかる時ちるべ
いく無じのるをうう〳〵めしつぎの侍御前よりわりて安世
まわりるとしをせをやぐて御前めぐ呂しくりる安世梅九
をとりもひ出てうやくちく寒温を述てかしこまりしく賴光梅
九をつけのひろかれは何りのぞとのるまつ安世答てまう
ちるは此若者は幼き時りおのれりとに養ひ置て教ててい
ひひあらまつきちかしきりのて文武の道〳〵にのまちう
うていい君は推挙を奉りゆくは御家人の數にも加へ
はせのはんとつざく今日めつし奉りていと申せば賴光

ほ〳〵忍ませのて器量ろうぐきにうきの姓はいうて名は
何といふまろし問せ給へ安世は仮上をいて姓は時ひへども
實は本性にていをびる名は梅九とつきていし南ゆしばはうえ
らけのうて安世も時世出の物語ども有りさてれるうう
せれ筥の中より包る物より出のひてゐは丹波國の
山賊のりちつくはる物へとて人のあるつと鬼の角ありと
いひつくたしどいうでわうん汝鑒定せよとて梅九よろけるよ
梅九手にとりわげてつくづく見て申るは此角は大
らつず西洋の歐羅巴の西小島臥兒狼德と申所の
そこの海中に大きなる魚のゆその魚の鰐の上に生ひる
一の角みていと長き物をそはいとをきりとりた

物と見てそれといふ〳〵申せども人〳〵魚の背よりかぶとの角めき
る物あり事少も及ばざるとぞ梅丸が博識なるとぞ感ずあり
頼光うたねて此角につきて思ひ出る事あり書の泰誓に
如崩其角といふ文あり人よ角あるべきをもつて此文
にとゝかゞ汝説ありやとのさまに梅丸こたへて願ハ蹶と
通じ角ハ詩に所謂麟之角の角なるべく さらばと
ひさうしを地よりつる事うしおぼえ詩よ文選よ受化而蹶
角と見て漢書よりもさる文字見てゆゑと申せバ大きに
興よ入のひてどしたの疑ひ一時よひらけぬ角よつきてを猶
問べ記事あり萬葉集よ角のふくれたるよ詞あり いら
ける物をとのさまふるとハいまゞ覺悟仕りとゝ但ふぎう

のかを嗤りてゆゑたる哥にてゆゑだ角のふくれ男陰のこと
なるべくやともおぼゆと申せどさてハたゞびあひ
いる詞もあざやかに少ゆとてまひく梅丸が頓智をあぐ
ちせのひろうさてけうつけのうけりびめぐりて弓ハひくやと
のさまへを安世学問のいとゝ深どにやきを射させゆひ
きと申せどもとうたゞもとして傍なる弓矢とりて接け
るに梅丸手にとり拜して庭よありさちて何をうつるまに
らんといふとうゝ湖水より雎鳩ごの羽をのして飛きたる
を見ゆひて射ておとせとのさまふ梅丸矢うちつがひ
しねらひうさうてゆゑもるにいやりうびをさごハ庭なるよ
ほとと落つ人〳〵射うく〳〵聲をあげてわむる頼光殊


ちめまろやすよ
抱見安世よ
とくもおりたて
賴光の忍
ざ為よいる所



感じのひて飛鳥をかく射おとしつるハ末代の養由基も
いひつべし手練のほどおそろしき迫よおぼえくるもとの
まひて庭よおちうるをちごと見やりのひくおそしるを射
ちをつるハ我あやまりなりかるいみじき夫場をてい
づくわれ殺生をつる事大悪者の所業ぞかしこと
後悔のはけしき見てらしを梅丸頭をあげておのをと
其ころつかくゆへども出詞でゆくだぜひかくつくまりてゆ
但死せざるやうにいさう羽ぐひをぬひる汁射てゆくだよも
死ぬべくハおぼえゆへとび走りうて矢をひきぬひるを
鳥ハ羽うちて空さるよのぼりてとび行ろかるさの事
にうへ遠ち慮りなりるようて人くこぞりてほめのちり

けり 頼光斜めうび感じのひてうしの場のやうたく
ましをを庭よひき出さをせゆこづくさねきくろひよ敵一
ありそて是ハ當坐のうり手物でそかりろうちて仰せ
くるハおこしが如き物我郎等とすべきよわうび公家へ
奏聞をうけて官爵ハ朝議にまかせゆん奴このうび
國々に蜂起せる賊等退治の宣旨蒙りるハ我ちう
ちうせる藤原の保昌あそんなり日ごろびすさちてまろ
高鳴よこりりをる齋明を討とうべくし此比其支度
最中ちれ辺保昌あそんよ従ひて賊徒を討とりて名をそ
むとハふをびやとの後梅丸うりて申るハ齋明ハ
りさくこの獣ゆてゆへをいうで討とりたく存ぜと嬉しき事

と觸りていそぎ此勢を加へ下さるべしと也。頼光我家人
尾張國にすめる者共にいとく觸をなしつかはしたれバ彼等
ともに軍を起し攻のぼらんず。前後より相むかひ
て攻んにハ凶徒等をみなごろしにせんこと日を過さず
ず。けれバ内裏の守護にいとまなけれバ今より都へ帰り
なんわどのハ保昌朝臣の営に至りてよく軍に従ひ
出陣すべしとのたまふ。安世よろこびて梅丸にむかひてい
我ハかしこのかへりがけに帰りて薗生中もさいし語りきかせて
悦ばせんめでたく凱陣の時を待て對面すべしとてく。
いとま申て安世ハわりと乗し道へ引かへす。梅丸ハ猶御前に
ありてまもなく軍の評定あらく終りける鎧うちきて馬

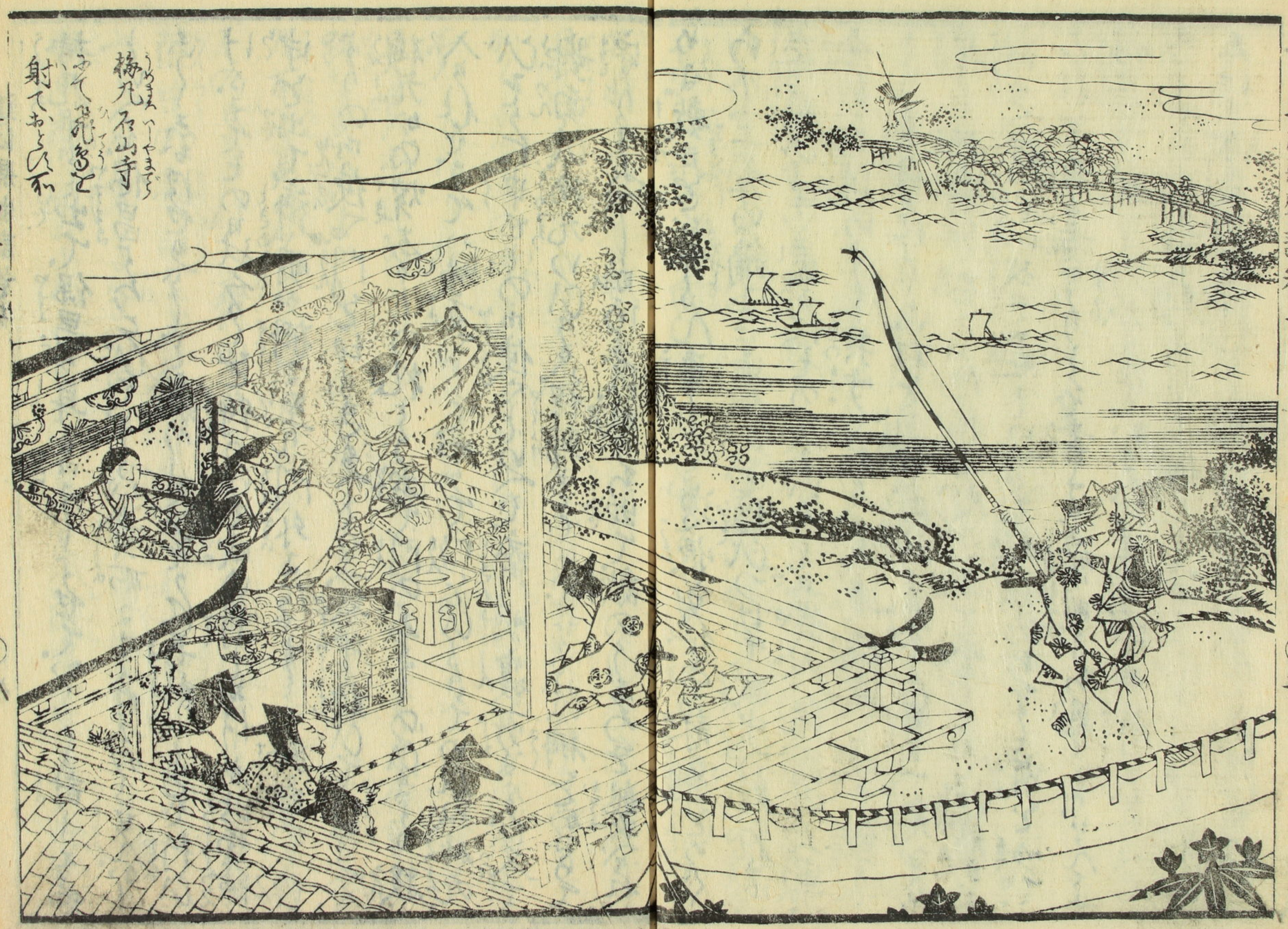
うちのり。保昌あそんの館へとうせ行けるが、こゝにハ保昌
待とりのぞく子細ハ頼光あそんの書簡にて承りぬ。此度
の朝敵といふハ我弟保輔といふ者ならびに甥なる齋明
にて彼等狼籍いたしけれバ人民窄籠して安き
事なし。これよりて其強に討手をこふうけ罷下りし
より計策をさばかりしへば営りてかくしねんごろす
からふに梅丸も手をつくして御軍勢まくりけれバ人も
わしがくそのはたらきのがんで御役より立べきたてゝ召つれさせ
たひけるぞよろこばしくこそしかるといふ。保昌梅丸を長押に
いざなひ萬卒ハ得やすく一將ハ得がたし。此辺戦軍
をたすけなんにハ今度の合戦勝利うたがふべきにあらバ

て大きにうろたえて、孟より出でくるまきやうを、
走りそしらう保昌が軍勢催促するつのひゞ爰よ止り
居て日をえらびて出陣とぞきけれ。

○田村將軍

ちても藤原保昌朝臣は、在京の武士四百余騎を引率
し、まづ齋明をうちとらんと、近江の國高嶋なる城へ
ゆきつゝでで責たりける。賊徒は山野を家とせる命
を惜しびのあまり、敵を物ともせず、無二無
二にふせぎたれば、戰ひ難し。京家の武士共もすこし
いろめいてぞんじたりける。保昌此体を見て、今度の討手
某乞ひて、敵向ひるかひもなくこぼりち賊徒行ひ

めよ。數日をおくらん事こそ遺恨なれ。とて討策をめぐ
らし、上差の鏑よ二通の文を結びつけて、城中へ射入れ
齋明ひらきて見るにその文よいとく五畿内諸國の大軍
今朝出陣のよし、其ゆへあり。貴邊猛威を以て禦ぐ
とも多勢にくらべられを圍む。敗北は及ばん事一定なり。
早く此寨を去て他邦へ走き生を全くして後榮を
計へ。保昌此攻口よ在といへども、叔姪のちなみ有とて、
おれを告る者なりとぞ書る。齋明うち見るうち、なんぞふ
保昌めが我をうち出さんとかまへたるなり。いざ討よかちいん
やとてかの文を引さけ、同くくばしにゆひつけて射返
しけり。保昌見て、計ごと行はずいるよせんと愁ひとれを


梅九石山寺
ゑそ鳥を
射ておとす和

梅丸すゝミ出て保昌が耳に口さしよせてかく〳〵計ごとぞさゝやき
といへバ保昌よろこびてさらバ貴所にまかせ申さんかし
さい〳〵おほせ候へしと云かはしてひそかに其計ごとをぞ行ひ
けるさてその日のくるゝを待つけて戌の刻とおぼしき比梅丸陣
中を出て斎明が柵に至り門外にたゞずミて鈴鹿の御陣
よりの御使ぞ門をひらき候へといふ城中疑ひてためらひぞ
梅丸かの焼ぶくろのれより出て門のすきまのひまより投
入れしされバ味方とてやがて門をひらきていれね梅丸
ひそかに申せよの御使といへバ斎明寝所によびいれて
対面し梅丸いひけるハ保輔ハかうかうして柵をかこミて
守りゐるべし日のくれ我うち出て敵のうしろを襲べけれバ

其時うち出て戦ひ給ふべし左右よりはさミてうたんといへり
保昌がかしこまりえん事代衣の物を探しんから安うり
かく乱軍の中よりそのうへでおほせらの文ハまおゝせひとて
らかりたる紙より出てつかはせハ斎明よりて求まいらし
見るバちかくのうしろにして有まかるべくもなき保輔が手
跡なりけれバいよ〳〵心とけて陣中にぞ留置ける夜明て梅
丸所々見めぐりありきてたのしげにうれへありける
その日も暮て斎明梅丸をまねきて酒などすゝめ保輔が
陣中の物語などせさせておのれも飽まで酔てうち
ふしけるに子の時ばかり俄に陣中に火おこりぬとさけ
ぐ斎明おどろき起出て見れバ陣中四方に火燃あがり

たり城中の者とゝさつぎてうちけさんとするに折ふし風あらく吹く炎ちくんより出りられだぜんかゝるく我ちゐよと門をひらきて外迄出しぬ保昌八四百余騎にて大手の攻口を圍まゝ手勢の中より齋明をゝく見知る兵八十人ばかりを勝て搦手を太る事二十町余の間ゆて二の田乃畔ゝこの木陰より五人三人づゝ伏かゝ一組より一人ぶく齋明と見るなゝば貝を吹べし其ほゝ貝を腰より少ひつけ齋明を見せあひて いけるべしをかゝる時八十餘人乃兵一度よりゝ吹せけるに此時齋明城中より出りえび信濃路へとゝるゝ郎等二人貝して遁げ出やゝ十五六町落のびて城の方を見返りえば火さゝりよりえのぼりて敵味方の間乃聲矢ちゝびの音ゆ聞ゆ此びの強盗もあわてて行まゝ入而ゝ待つけたゝ保昌ゝ兵ゝ一せの貝を吹ゝて八十余人集りきて齋明を中よりとあゝゝとしんとひしめきり齋明いゐハかゝよし死とのゝびよ難ゝ勇をふるひて戦ひゝしと梅丸ゝ射る矢眉間よりとゝほり眼くゝて遂よかゝとゝる保昌斜めゝびゝとゝびて明石ゝ都へ引べゝとゝきびゝゝ敬言固ちゐるゝ矢疵ゝゝゝゝを待ずゝゝあゝて死せる賊等多裏丸調伏丸夜又太郎金剛二郎ゝる頭を断て齋明ゝ兵ゝ梟木ゝでかけゝゝる此度の勝利ハひとゝゝ梅丸ゝ軍謀よりゝゝゝゝて其功を賞して官軍ゝゝ感しゝゝけり猶ゝゝる残黨ゝあるゝゝ陣をひゝずたゝゝひてを

日を過しける。齋明が一黨亡びうせければ。近郷の百姓等など
して安堵の思ひをなし。山たかくかくれたる者ども。資財道具を
運び返し。ふたゝびもとの家かへ帰り住て。ひとへに保昌朝臣の
武功をぞ仰ぎたふとびける。此時梅丸八郎等拾騎ばかりひき
つれて保昌にもしらせず。ひそかに神崎の里に至りて常人が家
をうかゞひ見るに。安世が家を我物としてあるべきかと思ひさだめし
住ひて。鼬の無き間の貂ぼこりとかやいふさまにていとくゆさ
うにくらし居たり。おほくの人なればかくぬすびとのおびゆる
世にたやすく家居なしておほざうなる住居なしすべきにあら
ねど。常人されにかれらが社に入て。腕にあるじをさへいれずまた
きば。同類のなからにかぞへられて。盗人どもゝ手ざい事を曰ば。

金剛がりといへども。こがねおほくつらうてびてければ。慾にふける盗
人なれど。やがてうけひきて衆をゆるしてあつくむつびかはる
ほどなり。梅丸二十町ばかりこなたにて衣服ぬぎかへて。よごれ垢
づきやしなひたる。麻の衣着てぞ。いそぎ常人が家にぞ往
たる。案内を乞て。梅丸ぞなほりて。いまはかゝるべき身となり
てゆへ。なすらひえたる田楽を舞て。よのいとなみとなしけるくれ
いかで見參にいりなんと存て。わざと参りてはべりといひたせり。常人
聞て。薗生が事もおもほしければ呼いれ對面して。さるは
わかしいまは田楽をとりて。たづきとなしけるや。先きかまほしを
薗生殿ハいかになりし。わぬしの妻となしありしかど。ほのかに
きくほどに。いよくさかへにやとゝひ。梅丸からくしうて薗生をあが

なりひさりて宿りまでいかやつれてゆくど異夜盗賊の入り
来ていづくへか奪ひ行てゆくへもあらび成ていとい常人なよ
思ひるるハ居てハ我いひつけやりしやつ俄よ異心を生じ蔵
生を奪ひ取おのゝ物とし他国よ落ゆきりやうんいうもて
とり返さやりどゆひるるあらびぼつりて梅九よ向ひく
さてくんづるき事を承りていひさぐまて見参よ入る
ゆへどのどうよ物語ゝ世まほくゆへども取ゝ
まうくどのきあひてゆへばまさを對面あらめといひあつい
たちて入くんと次奥の方ハ人あまくむしめてふぎらく
笛鼓なくしておそやひ梅九常人が袖をひくて客人の
使入しあれどさいそひそしげが田楽のひとてふぎらゆへ共

一かあでゆ覗よ入くゆとしゆへを常人うかづきてこれい然ゆく
おげくゆ奥の百ハ田楽する人く両三人せくじ置うれ辺の
堪能るハ吾ある所ありちらばもくゆ立すひ弦くらくゆ乃
宴席をさきけあつゆどりひて田楽どものなくひとる饗
の肉くもすひて入ぬそれりさあくの田楽こて終りて梅
九ちさくそ出てせんず萬歳の酒ほくとりゆ曲をおり
ろくく舞をどりて見せられば満堂無いよ入てふの田楽ハこの
人よつきけうり異人のハなくくにとてざるくりとてきう
丁梅九をほのくありてゆ今ひとてうるべくんこをそひさまよ
せむくゆ常人樂屋よ入来て客人のいくくうくくゆへばいまひと
あび興あくとちくくゆ見せるくとりよ梅九おのれちらにあくさに

はくれる田村将軍といふ一曲をうたふ。これを舞て御覧にい
れ入まゐらせん。これハ後巻にて出させバ鎧かぶとかしこびあんなふ。
常人何心なくねりごめに入て。ねすまひする鎧かぶとゝりも
出てつけしけれバ。やがてよそほひさうどぎて立出て舞すなし。
はてすゞか山の賊徒をたひらげしことを語りつゞけて聲たかく
のべけるを。こゝなる人おりしもかゞりて。耳をすましてきゝゐたりけるが。つく〴〵
表のかた俄にさわぎてかしがましく何ぞと聞バ大将軍
保昌のあそん入来りたまふといふ。常人おどろきていそぎ
事あらんかしとかどさへきてまちけるに。あやなしいひつべき門の
外よりおほくの士卒はさちのそびて鎧のかなもの。きらめきて来り
あひて螢なんどのとびかふやうに見ゆ。大将軍馬よりおりたまひて
我家をさちして入来のよしをきゝて。心の鬼におそろしくなりて。
ければくしふるひて。あり首とらる見物の男女ハ。庭の方へ逃出
て。道かしやぶりて出るもあり。又ハうち倒りて。何事ぞしらく
のぞれをそれぬのも有けり。梅丸常人に向ひてされば驚あひ
そのおの出むかひて。やそく帰し御まはしせんとて立あがれバ。
常人鎧の袖をひかへて。どこのなるおもひそ。大将軍に向ひ
参りてげにその身の物申べきやハ。あるはちてハ我さへいみ
おの罷なやおもんとく。外へ逃出すへとしよ。斬きて齒のね
あはんさやらにふるかひかりつよれけれバ。くらへうすかしてろん
とて。常人が手をとりそふひて。のどくとはゆとして出る者人
うち見やりて。だましひも身にそそびて一定梅丸め。ひきくれ

梅九石山
のすけ
軍
出陣

てらきめやうらんさもあるべかりし大将軍の何とて爰へ入来りつるとて障子のひまより覗きあるに梅丸表の方に出て會尺すれば大将軍座をつきあひやくしきく禮をなして梅丸ようちむかせあひ何事う物語ありおとひ光人耳をそばだてきくにうくも聞へび大将軍のれんきくおそさて もちねりし具足をいとの結ひ助ほのぐと少ゆびよく心も乱ずうかびあるる大将軍又きざいちのひてかしこを待つけ奉らんとて立あがりて出ておもてあるこの軍兵左右よりうびてびうづく敬言固めて出く行梅丸おくりまゐらせて立帰り奥さまへ入て見るに常人面ハさるぐ土のごく成くはらちの紀てうひとり梅丸うちうひていりに常人汝我

師のちをを宮びぬすびしよおちあづけておかるかざしの名をとうるがつのいるや我師安世とのたかるとこの人相傳のれんきせかぶハ鎧あてあるるいよ〳〵腰つづけてさそハをのるれぬと思ひく逃出んとするを梅丸おうをあげてのよも来りてかくあるよしめそうしバ表の方より士卒十騎ばかり入来て常人をとらておさへたるハ我ちばめり名のりて汝を捕へべしと汝逃かんとのるかるびは鎧いるよ志あすんとうて撥くハかるたるかりとひくで常人恐れて魂も身よをびさんしど面ぬはるるかて云るハ物ハ海戦よりのぼりてつきをもえさるよれいくで薗生を吾妻とす汝も安世もあき物とさんと

男ひとりにその事ひとりもかれぬべし鎧さへとりかへさしつゝくちをしけよ夢まぼろしかとうたがひ思ひ入て焼てまゝを吾てづゝりて出ゝ後よりもせて返せ一ハおさまりきまでおろかなりしといひて足すりまて所にてうたひ梅九ハ田楽どもぐちすて置る扇とりあげゝ。おしひゝき三尺の鉞の光ハ氷手にありとだにやうにうひうぶ部等どもゝ笛つゝおどでんでよとりて一張のうの執ハ月なわ行ゝとうひもやして一度よたゝと矣ひて出家人ハ縄をとりてさよあれいさゝて出行ける後よきけむ家人ハ公家の出さゝとしてきらひぐ嵩へなゝつゝたしるゝと云

○うゝんげ

古に尾張よりたゝ嵯峨の左衛門ハ梅九よりひつけゝ。都へ中ゝそやりて後やゝきひとゝりそゝるゝこゝろ大宮司来りてひゝるハ報光朝臣より定綱よ近使のつゝりて國ゝよりて源氏の西家人ゝいそゝ見ゝ賊徒をうちゝろぼしべきゝ御読ありて此國の武士ゝりゝその支度あてゆゝ時ハ比くをかゝ一のひ隠遁の出身ゝ時ハひきこりおゝひ蔭見ゝ賊ゝいそゝうゝちのひて函徒を元一のハゝ人ゝ出き物の具ハ所持あてゆゝバえゝらびゝゝ世弦ゝ引ひゝ世ゝ一九場門ゝゝおづきゝゝゝくゝて告のひつゝ我者ゝりとゝ。みもゝ朝敵とゝ。ゝ見のゝゝきゝあゝびいそゝきゝ。むりひゝんとゝそゝゝりゝ武士を催促あるゝ三百騎計を

集りしが陸をゆかば日數かゝりぬべしとてふたゝびつぎの濱より
船にうちのりてさゞなみよ伊勢國におしわたりいきほひ猛におそ
ゆくが。されば源氏の武威のおそろしきことゞきておぢおそる
ぬ人びと我軍勢の向ふときくより蜘の子をちらすが如く。十
方へちりてぞ逃うせたり。左衛門軍勢を下知して鈴鹿山へ
と向ひけるが。さて高島の柵やぶれて。斎明その外むねと
たのみたる者ども。ことごとく討死なしと聞て。さしも盗人ども
守りあへず。如法貪慾のともがら一旦は従ひつきたれど。
かく危急の時にのぞみては誰か一人も踏とゞまりふせぐべきやうも
なくあをさわぎて。ちりぢりに成て落うせぬ。今はわづか十騎あ
まりぞのこりたる。鏑ふれおひたるはかくてもなく落ゆくさ

せん事かなふべからず。敵のちかづかざるほどにとく落ゆくべし
とて。十人の者ども。みな鎧ぬぎすてゝ。裏の道よりちりぢりにいづく
ともなく逃出てぞ行ける。されど天命遁るゝ所なく。結句は
京都において四天王のために命をおとしけるとぞいひ傳へける。
尾張の國の軍勢は。柵ちかく責よせて鬨の声をあげけれ
ど打出る敵もみえず。人こもれりともおもはれざれば。やがて落させ
て。ゆくへしれずぞ。左衛門下知して火をかけて賊營を焼はらひ
をせ。かちどきつくりて都の方へとぞうちのぼりける。又藤原の
保昌は。近江の賊をうちたひらげて。梅丸をいざなひて。その
よし奏聞をとげられば。叡感ましまして。保昌
をば丹後守になされ。梅丸が文武の才をほめさせ給ひて。

盜賊の大將
義系の
藤明

近江掾みぞかなしれる。各朝恩のあまりにけかきことを拜謝
ゐ奉りて退きるるそしらう梅丸ハ保昌にのそんよひきつれて
頼光あそんの内舘よりるる門前よハ尾張の國の軍
勢いらるゝ。げよりうびてとり。梅丸門を入て見れバ師
ゐりる安世とく愛よまわりて出むくて凱陣のうるびを
のべろ傳来の具足とうるしを事ひとくよをこのいさを
なうとほびいひてるふ我娘光毎をものて巻りて四領
の内よりぐゆ置う。光御見参ゐして人くゆも逢まくて
らちつれざちて頼光の御まくゆを出りる。頼光あそんくく見
ゐうびり梅丸をやくそ頃ゆきうるつどのが功ゆて函徒たひう
ぎぬる事。保昌あそんのみゆて。つまびくうる知りぬ今日朝

廷ゆて近江掾よ任じゆるとし。今のほど少屋びつさこそろう
こだうるゆとのさゆへを。梅丸頭をさけてこれおのれが功よ
ゆをびひとくよ君の御威徳のかゞやける余りよゆとうらく
やはりさてれうるけゆひてうれ梅丸よひとろの望をうけ
ひくべくやとの後梅丸しこりて御諚でゆへバいうるを
なりとも。いゆるく奉るべきやうゐたびとヤせバ。我家よ譜代
の老臣ゐり。いま六旬余よ及びぬれど。嗣子ゐくて。明ゐれ
是を愁ひをりつどのうれが子と敵て終りを見とゞけ
やうんよハつれも又ゐりゐろびこれよるるとゐうん。
とのさゆへバ梅丸ハ這すまひゐうんやうハゆそねどはきよ
旅館みて親子の契なせ。老人のゆくゞまさも異人を親と

ふゆかん事義において安からぬ事に候へバ此事計ハすこやかに若侍が
くゆといふハ頼光さてハせんかたなしけまでつどのが如き若者ある
事ハ老臣どもにとく見せばやと思ひぞれくとのうまへバかしこのつぎの
侍ひきつれて出る所を見れバ大紋にて召ばしきてたちある老
武者ぬすまへ出てかしこまる頼光老人のかほつくづく若者を見せ
むとて呼出しつるなり此若武者こそ此度近江の強賊斎明を
計ごとを以うちほろぼし未曾有の高名なしたる者なれよく見
ありてあれとのたまふ老武者すなはち頭をあげてやをらのぼりて
見やりたるが驚き何をてもやおれ梅丸よそとりて梅丸かしらを
あげて見るに尾張にて親子の約をせし嵯峨の左衛門なりければ
何ざまおどろきて親人いかでとく都にのぼりきたしいかなるにて

そすくやうにもせよひつやとぬきりけりてかくて頼光も浅
御しがりあへてさてハとく親子の契りをせしこそ思ひなけれ
けれバたゞちに父子のむせびさせてんと思ひしハおそくなりけりと
のあひて悦ふるこび斜ならず悦び梅丸よのたまひけるハ此りのそを
我家の老臣にて藤原の仲光が弟にて季光といふ者なりし年比
嵯峨野にかくれ住てありしが父の殿にもひさしくつかへて無二乃
忠臣なりしかばいれも鷹狩のついでありてさちかたてしろび
おとづれし事もありきこのたびふしぎに尾張の國にありてかしこ
より貢のぼりするにハ我さへなほじめて知らざりつどのかゝる父子乃
やくを結びし事ハ我心に符合して亦かさりよろこびし此事ハ
何よりもめでたき大方ならず季光てあんでそのまことに

はじめて逢しより親子のちなみもむすびたるを聞えあぐるやう譯
聞てふかく思ひがけなく對面なりしも偏に君の御めぐみなりとて
かしこまれバ頼光うなづき今の程安世が物語みて聞けど家族の
ともがらとも出てきたれかしと呼いれてのどかに對面すべし
われハ又新發意どのへかくとはなしもせおくすべき事のあれバ
奉らんとてたちて奥の間へいりたまひぬ安世ハおほきに悦びて娘薗
生を呼いれて季光に對面させ季光薗生がかたちのすぐれ
たるを見て、あはれよき妹の君をまうけつるこそよろこべバ梅丸
薗生に向ひて袈裟のうで君ハなどてとりあはざりしと答へバ薗生
かしこの一間におはしまし伴ひまゐらせんと申ゆへどかゝるいまいましき
身ハかしこに見れおそりへハそゞろになりかつ松のおもえんとも思へ

うしとの給ふすゝめひて詞もやりまゐらねバなかゝひとり参りてのちと
いふ。梅丸安世にむかひていひけるハさきに石山にて初めて殿に見えま
いらせし時君我姓を坂上と呼給ハ本姓にハあらねバしかと聞て此ひき
事いぶかしくおもひしかどもひつれど出陣のさわがしきにまぎれ
でとひまうで出さもなかりき我本姓別なる事ハこゝろえがたしいかに
らせの文といふを安世うちうなづきて此邊をさかりし時なれバ知りたれど
かの田楽をして世をわたりし坂上の猿丸ハ御身のまことの父
にハあらずといふに梅丸敬馬していまいしと眉をひそめて只今なり
二十年むかしのかなりき猿丸田楽して都にのぼりて三ッ斗の
みどり子をいだきて帰りきたりてそれハ旅にてひろひたり
とて乳をもらひて育てやしなひけるが兒のおひたちを見ていひし

えーしー子ありしいちぐ。なぐ心もいでらん物をとちりし人者
にくくめてそのうー児みもかうも生ざりき此事ありしハ我のみ
ならず一村のうち老ありのハぶかくありてをりそのの時のひろひ
子といふハ近辺ゆくさいらよおそるるにちきよ頼光君の姓氏をとらせ
給時いつりて竹ゆびきあるねをつまで申つくと語るにちくば
我本姓ハたれよりて問わきーかゆべきやといへむ安世ひしも又
ありえんさくぐ出るよかくさてのうーつる猿丸が一品をそらろ
おくるひきて見のへしいつよ梅丸菌生むりひて例の品これ
へといく菌生常にかくるるびりてゆくも只今これ〳〵あり
ひとて西念法師にあづけをてきむりくとしいく安世あつあけて西念
ありくとくぐ侍りつぎて西念をめてきりり梅丸西念がりちる

代長物ありて封をひらけ三重計ハ封じてありかあけてこれハ
一通の文ありうハきよ梅丸よりの猿丸と書りりこれハ
ハそこのまこの文をひるこ康保元年三月十九日山城の國
舟岡の山そのぎにひろひ丸て云見てやしかひてぐこうま封し
置一筋ハ其時ハ身とそもひろひえし物ありとこわぐり
季光のびありて何とくくしたる梅丸ありみしば生
長の後まこの父母よめぐりあひさまんもりもやくくし
くく置てのありとこうもをそくび梅丸悲歎の涙よりしりるが
ちのまくび筋をかいてきて子をまこの父母のほくくみ
ありとて身ひくくとつけて波おとせ参いぐうげ
おりちくその筋ハ仕よ人せのくと手ハ見てこれを我子

愛丸が死しける時、うまちせて埋めつる筋のれいくぐその物の
ちよはあるとめを大きにおして不審すれば安世うちきくより、
此筋おくなりのひし兒のうまちせて葬りすつるとなる。
猿丸が遺言をあせて年月をかぞへ見れば、とこのさまよ
なる愛丸と名づけし兒は此猿丸みてはあるべやとしつゝ季光
かしらうちかりていなゝ定をかゝほ〳〵せてうつゝあ葬りへとば、
ゝゝかりうれとてゝゝびは世よ知べきよわゝ次といさるにくゝと
此筋はさゝく猿丸がりとにわゝゝとゝうえねとてんてうろ
手くゝて頭を傾つゝびゝくゝしひねうよ西念うちろ
ちりて聲うちあげて南無觀世音とたゝかよ唱へるを人々
驚てうむさ見れば西念赤かちのやゝるる涙を滝のやう

よおとゝつゝすゝゝ出て云るはさて〳〵ふしぎなる事をものゝ
に見ては事なる人〳〵よりもうんも光法師が身の恥辱と存ぜれ
迫はつゝゝゝゝとものれが恐しをゝんよはゝゝとの此不審のちゝべた
道理もはんねはは恥をすてゝ過ゝゝむゝ物語ゝ奉ゝ愚僧
男なれは時は狼冠者と人よゝれ山城の國田原の郷よ住く
はひるがにのけ氏博奕よのゝ心をいれて放逸無慙のゝまひ
のゝ住り親族一門ゝも見ゝるゝれ乞丐の身とゝりて〳〵毎
岡山のけりよりとゝりてはは時康保元年やうひの時いゝ
人のゝとゝる子の野べ送りあり玩物調度金銀ゝ掘ゝ
ゝとゝきゝて俄よ例の慾心おこり夜よまぎれてがゝあ
至り人ゝねはとよゝりうがちて調度の類は色よゝ入を持

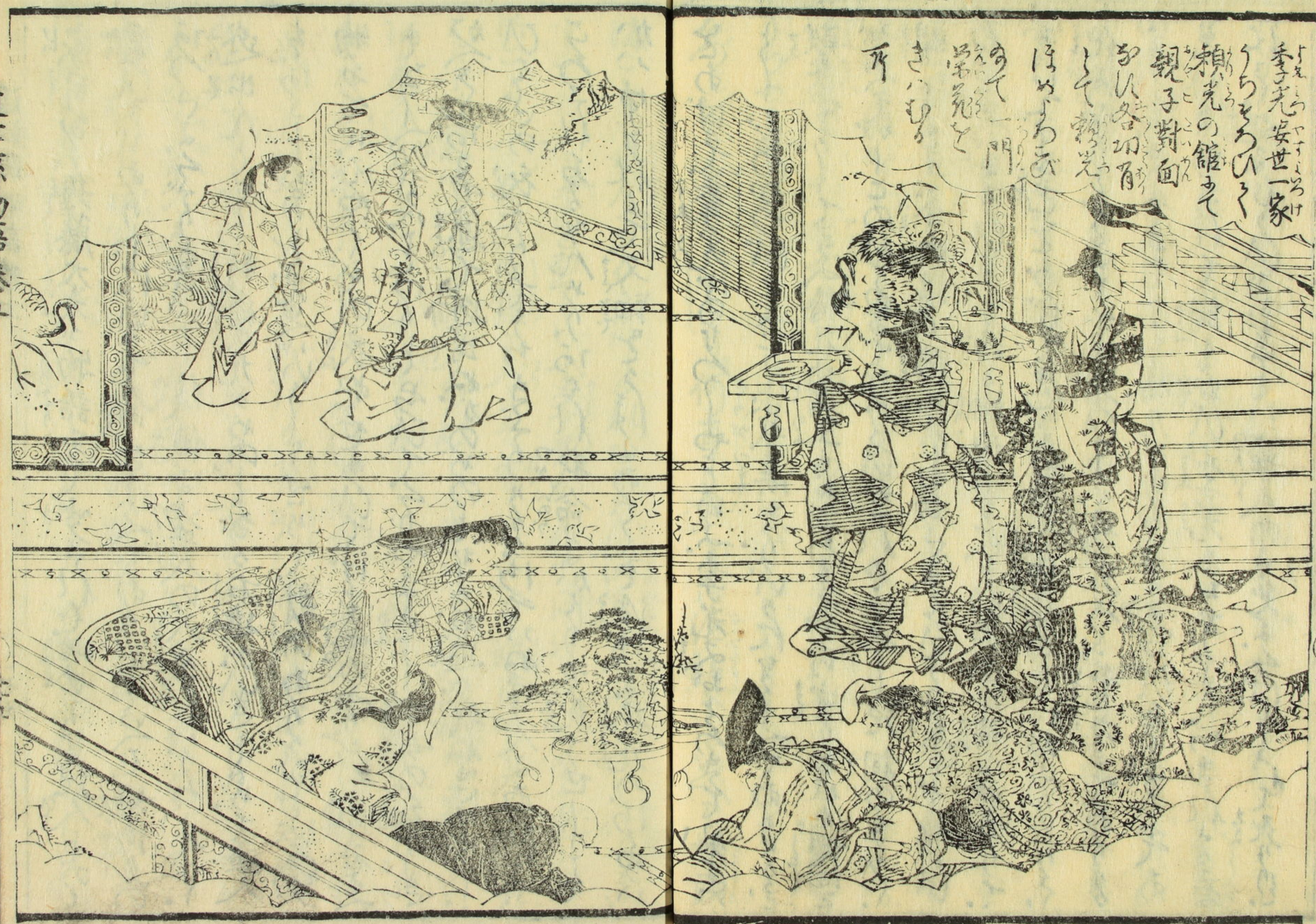
帰らんと存ぜしが、幼き人の死骸の腰より物のぶらさがりゆくを、引ぬきとらんとつくせども、思ひもよらぬ此児のうごかずして、泣あかしぬ。

をとゝろ松とりて、旅人のきうあれば見つけられしと思ひたるよりの旅人、兒をいだき包をおひてゆくんとす。やゝどゝとゞめて、ちぎりを程うちあひて、きやつ強力の男なれば、おのれをうちて四五丈なげうち、ほうぐ投てゆくを、塚穴の中よりおちいりて、うーとうめき、岡絶せるほど、兒と包を引さくいづちよりか、影も見えず。猶のこりる物やあるとそこらうちゞりて見てあれども、ひさ兒あだの手まあるうりのまく、これを両の手よりちぎりぬぎすてゝ、其夜の暮よ老僧一人来りあひて、いとゝ大事とゝく秘めおくべし。おのれ成佛すべき因縁あれをいまゝり行ひを

あらゝ兒、殺心修行すべしとの給と見て、夢はさめぬ。それより、ひとすぢの道心者し成て、抖擻修行してかくてあるうへ、其夜の旅人は坂上の猿丸どのあて掘りぬきし兒と申は、猿丸君あてにおちしる。吾まさ梅丸の天よ命さすけられしを、おりくにやしきの因縁とて、首よかけうる色ひきてちひさきあだり出て見すると、季光をゝく手よりとりのけて、これを満仲の君より、兒うりくに物あれおりてよかゝ花をあたぐきたるに、肉身をけし、子あてなりるうとそ、ちりつきくむせびなく。梅丸も手をあてせつく、思をびたとの親よめぐりあひ奉れる事、神明佛陀の内加護と、親子互よ手をとり

かなしく、さぞ、涙かぞへしなるに、季光目をさめて、二十年
まへに死にけりと思ひし我子よ、かくまでさびわびたるひしは、盲亀
の浮木、うどんげの咲出しうり、希有の事なれば、つれなき
し姫のゆくへまでなつかしく、ありてかなうれもきむ、進つよ、ぬ、ぬ、
くるるこびおりそはーをぬひびのさをよろこばれていのちう
なひてーにそーちよとなげで、梅丸一目の孝をもなるこびの恥を
ぶに拜ー奉ぶぢりしハいるる宿世ありんとて、あるをあげて
泣いぶんかくるよひとなのうちさつぶーくーとなく、恥をれば
何者ぞとて、妻世障子ぬーあけて見れハ、代表のうぶ、ぶてくよ
うちふーて、前後もちぶびなきちびて、男もうきねべく、ぬー
ちづくをり、妻世さちより、何事有てさハ泣ぶをといくで、姫頭

をあげて、季光どのなつかしやといふ、季光又おとろきて見まぶ
とーしぶろむつびらをせし、我妻なりいくたなぶーくてありるを
聲ゆをしてとろ、梅丸薗生もおどろきてうち守りれを、姫泪を
おさへてがーこのひとなのてたのうひめうしぶなのやーに詞のをしく、
聞てるまく、今のほど障子のあるさよをひとり来てらかぶひ
ぬてゆへばおりひとーぢる物語どもたーうしさの胸よ世ありて、
おほんず色をあげてゆ、といひて、梅丸がりとにねざりうく、
他人ありとぶさまでも思ひしハ、我うみつふ、梅丸ぶてありる
よとてぶりのきてちく、梅丸ハあるりよ思ひびある事光あ
色ばーあきれて詞も出び、季光もおなぶーのきしれる表
にく、姫よむうひとーかこてハ盗人のさ光よ、ぶびきれて死りと、


季光安世一家
うちそろひて
頼光の館にて
親子對面
なほ各切腹
して頼光
ほめられて一門
栄光と
きはむる
所

家司なる兵藤大夫が物語あて、少うしで此世よりなき美人とのこと思ひ〳〵ありしにいうで命かぎり〳〵てありしといへど、姫は身のつつしみよそぐりのひし〳〵後俄よ盗人の入事しばらく〳〵逃出んとせし時、愛丸がめのとなる右近がひきとゞめて盗人をいろ〳〵せめて、財のありかどこ〳〵ぞと問ひ、物をいはくその衣ぬがせ、女のやうに出立をさせ、下女の衣をきせ、とをへ〳〵ゝ、ばとうりとゝひて、そりやまあ〳〵下女の衣をきかへ〳〵なりて迷て逃出ぬ。かのめのとなる右近は我ぬきすてし、ひとぎの衣とりてうちきうるぎちてはぬすみ人よあひく、うろたへ、なんなりなりなりなをし我命よかりて死うせしそかハゆゆしとて又袖をうほまあ〳〵で逃げる。楠丸はちゆハ

海ことの母人よりそおりしし。おりそびは日は不神をのく住りき。とて顔よ手をあてくいる。未手光かさねて問げるハいろ〳〵事にて此ことハ今日この内館よ入きそ有しとゝを姫月ゆしのごひる。えうらびぬすびとよりうらしてらきめこるを楠丸事りく。ゆのるひ出しりまで母とおりてあがたやしなひるとかく。きを、孝光手をうちてゆしも楠丸を寄奥の子こしハあ〳〵で。義子の契りをむすびたる。其所ハ陣ゝしどおとも又枝をかりの子こすせしハ〳〵ぎとしゆもあまりなりとゝいへど姫是ゑん観音の志願するとて手をあいせてかつぐをびゆくを。ゆ〳〵むし初瀬よ通夜志る時、枕がゝよ立おりてやしあハ。れんこことハ安しと告ゆ〳〵ハ今よりゆくすゑのるるべしとて。

夫婦やうゝよあゝを含てうこびり。梅丸ハ膝うちたゝき。
天を拝みてうれしぶ。菌生ハ老母をいたゝりて。脊をなで
さすりて。なつひ物す。安堂かたゝけとり出て。めつゝしといふも
のまりある。内親子の面對面して。少へをいざゝめでさゝひとり
うけ給へとて。なぐゝとりて。李光ますゝめ。おのゝ〳〵ずんあがし酒
ゝうゝてうこびり。西念ひろく。梅丸君と菌生君。
いまゞ婚姻の盃をとりかわし。ひついでよ合巹の禮行ひの
なんしといふ李光いで今までちる事をもせざりしとハ。
媼ばとハいきよりハも。すゝめひつしゝて。父君よりゝ也奉ら
でゝうよ行べきうハとて。かゝゞあひぢちようけひきざりゝと
語るかゝるよおりひうけず。色ぶてのゝ陳子ひゝきれば。人〳〵見て

あれば出あうゞ。頼光君却あゝて立おん〳〵。侍臣の面〳〵ゝい
かゝねよ土器のせて持出るもあり。又すえ膳の臺おのゝも有
なるよこれのさかなゝ。あまゝ〳〵持出て人〳〵のまへよもをおく。
光のさまひるハ。婚姻の祝媒よあゝぶしバ物せずとゝ家
おゝぶ我なゝぶちとかりて。おゝ〳〵朱陳の榮をゝんとすと
の後人〳〵ハさでかゝゞけるさの身よあゝりて。頭をぶにあげも
うゞゝり。頼光侍臣よ仰せて梅丸菌生よかゝゝけとり
ハさ老のひ出ゝゞうゝちあげて。ゝるさゝと今日のゝるさ。と
ひ出ゝ後出儀のゝ〳〵も。とゝ〳〵いゝひことゞ死ゝさきよ
乃聲もゞゞよ殿のゝかげゝゝとゝ人〳〵ゝうこゞ涙寒ゝと
ゝて。頼光人〳〵よのゝまひるハ〳〵ゝ死事ハ障子をへゞ

てゝ世すぎつゝそも仮の親子の契り浅からぬ過りてはとの親子なりし。これ希有の因縁なり。つゝてなげく世の物語ともすべうんやり。菌生が賊営よりとゝしと成さゝ智を以ての身を汚さじ。再文よめぐりあひしハ女中の丈夫はこと安世が娘といふべし。梅丸が文武よ長じ。ぐるハひとゝよ師の安世がをゝしの最べし。梅丸が文武よ長じ。ぐるハひとゝよ師の安世がをゝしの最なるまうりかまへて一家よ書ひて終身ねんごろ孝養けゝやゝ怠ゝざるべし。めのとの右近が主ようりて死しる。返ひゝ。あをれ。西念が数九のちゝめハ。親恩のえるるみて。あるも降りの堂風なりしる。尋常の法師よこと なり。かれが生れ出る田原の郷ハさいをひ我ものなり。

かねて又新發意殿の宿志ゆて一宇のがらん建立の心あしむがしこよ一寺をゝて。西念を以て住持とゝ。右近が亡霊を弔ハ志もゆ。梅丸がひゝゝゝりしハ。まさく観音の霊験あるゝ。猿丸が慈心のをゝこゝよりるあしひこゝゝ供恩あり。かれが遺言の文をゝづゝて。塚をきづ印ゝ。其あとをのこひべしとのるかさゝきめぐその詞まんゝハゝぐゝろこび泣よ泣ゝ。ゝもあへび。袖をあぼりぬゝゝハ求の世よいゝりて。猿丸塚。又猿丸ゝふげかゞよびまけて田原の郷よその跡をゝのこる。梅丸をしゝり。又の住りる。白河の家を修理しつゝろひて。ゝり住るよ。安世季光がゝにあり。郎等女ゝゝゝゝゝゝ。

ものゝ聞つゝて、ゐれもくと悔きてつゝくれぬ。むつ
にいまきりてふぎこゝくで成るかくて季光安世を別室
に住せ朝暮孝養をこゝろびちていとゞき子どもあ
ゆさゝゝつゞけてつきゝゝあまたくすゝてりくゝ世の学
花をきゝあ。ゆゝでゝ一期を正しくるとやん此巻くの
草子をあづけて。近江県物語とゝぶことゝ。梅丸が任所よ
ありて人くゝよ語りるをそのまゝにきつけ侍べるべし

近江県物語巻之五大尾

六梅園のゝ〜旅ゝり帰りはれくのちいつ
ア紀者ゆくとり出くゝ出稲うきちゆゆ者ゆよ
こゝくおのまにゝひつをちこのりてゝゝ多見ゆあり
世にれゝ自異ある事ゝ世おほゝ紀さくと
ゝし紀常乃華つゝひゝも小ゆゆとちとひる
おとの紀ゝりてきけ氏れしいをさ紀人のゝ
ゆんと歳こゝろえやゆゆん学先とゆやゝゝ紀
可このゝあゝ紀物語とゝ者ゝゝ学ゝ者ゝ

よ見えてるあをうつろふ色をおりひてもつけまつり
らん此物語きる翁のちからハなをさうきち
ちくえくらまるかちをもとに衆人の耳をかへて
うつ面白しなるかやとうしたかたいふ所説
ゆえありてるよりそのもとをあらはすもうし

風興亭高秋次

繡像復讐山石見英雄孫　全部五十冊

南海　玉藻　主人　編輯
浪花　一蒙斎　歌川芳梅　画

○初編　永師人作　七冊　○二編　玉藻主人嗣著　○三編　泉陽子嗣著　○第四輯以下作者一家

永禄天正の頃筑前名嶋の勇士岩見重太郎橘種季が生さちより武者修行
せし巡の武功大蛇の害を除き老狸の妖を殺め勇威を張め後ハ天の橋立ハ
廣瀬成瀬大川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し終ハ室町殿ハ奉仕て任官
し鈴木主水正ハ後盟れる主同ハ言挙豪ガ女邪淫婦岩瀑孝女新月ホ乃
鈴ヶ嶽の五雄と称する勇士の列伝霊猿悪魚の怪談ホ五輯ハ益入佳境新話多り

浪花書肆

南久寶寺町心齋橋　小立入

伊丹屋善兵衛　板